第３課　安息日―自由の日

【暗唱聖句】

そして更に言われた。「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない」マルコ2：27

【日曜日・十分なマナ】

「主が命じられたことは次のことである。『あなたたちはそれぞれ必要な分、つまり一人当たり一オメルを集めよ。それぞれ自分の天幕にいる家族の数に応じて取るがよい。』」イスラエルの人々はそのとおりにした。ある者は多く集め、ある者は少なく集めた。しかし、オメル升で量ってみると、多く集めた者も余ることなく、少なく集めた者も足りないことなく、それぞれが必要な分を集めた」出エジプト16：16～18

神様は食べ物がない荒野での生活において、天からマナを降らせて民を養ってくださいました。その際に毎日それぞれ必要な分として1オメル（2.3L）だけを取るように命じられました。それぞれ家族の分を取ってはかりで測ると、それぞれちょうどの分を集めることができました。神様は常に多すぎず、少なすぎず必要な十分な物を与えてくださいます。わたしたちはそのことを信じる信仰が求められています。明日の分までと余分に取っても、次の日には腐って食べられなくなってしました。ただし、金曜日だけは次の安息日にマナを取る作業をしなくても良いように二日分のマナを取ることができ、しかもマナは次になっても腐りませんでした。ここからさらに発展して、多く持っているは持っていない人の欠乏を補うことで互いに釣り合いをとることが教えられています。

「あなたがたの現在のゆとりが彼らの欠乏を補えば、いつか彼らのゆとりもあなたがたの欠乏を補うことになり、こうして釣り合いがとれるのです」コリントの信徒への手紙二8章 14節

【月曜日・安息日の2つの理由】

「安息日を守ってこれを聖別せよ。あなたの神、主が命じられたとおりに。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、牛、ろばなどすべての家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。そうすれば、あなたの男女の奴隷もあなたと同じように休むことができる。あなたはかつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主が力ある御手と御腕を伸ばしてあなたを導き出されたことを思い起こさねばならない。そのために、あなたの神、主は安息日を守るよう命じられたのである」申命記5：12～15

申命記5章12～15節にかけて、十戒に記された安息日の意味やすべきことが補完されています。安息日は、神様が第7日目に休まれ聖別されたように、わたしたちも自分自身はもちろん、家族も奴隷も家畜や寄留する人々さえも仕事をしてはらないことが明記されています。それはまず安息日を聖別することにより、自分たちが神様から創造された者であることを思い出し、感謝し、喜ぶためです。しかし、わたしたちがそうするように言われているのは、自分たちのためだけではないことがここで語られています。それは奴隷のような弱い立場にある人たちも共に休ませることで、神様から与えられた愛を示す日でもあったのです。これは忘れがちな点です。イスラエルの民も神様の力強い御手によって救いだされるまで奴隷だったのです。その時には、安息の日などありませんでした。だから安息日を守るということは、自分たちが奴隷から解放されたことの象徴でもあったのです。そして、同じ状況にある弱い立場にある人の気持ちを忘れないように、神様は安息日を用いられたのです。それは本来の安息日の目的ではないかもしれません。しかし、神様の国を貫く生き方であり、神様の愛があふれる安息日を過ごすことは、わたしたちにとって大きな喜びとなるのです。

【火曜日・平等な日】

十戒の中で最も詳細に書かれているのは第4条の安息日についてであることに気づかされます。安息日は奴隷や家畜、寄留者などの弱者が見つめられています。神様が彼らを優しい愛のまなざしで見つめるように、神の民もそのようなまなざしを向けてこそ、安息日は真の安息日として輝くのです。安息日は平等の日です。すべての人にとって喜びとなる日なのです。安息日がただ単に教会に行く日ではないことは明らかです。安息日の精神が重要で、それはまさに神様の心が反映される日なのです。

【水曜日・いやしの日】

「あなたたちのうち、だれか羊を一匹持っていて、それが安息日に穴に落ちた場合、手で引き上げてやらない者がいるだろうか。人間は羊よりもはるかに大切なものだ。だから、安息日に善いことをするのは許されている。」 そしてその人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。伸ばすと、もう一方の手のように元どおり良くなった。 ファリサイ派の人々は出て行き、どのようにしてイエスを殺そうかと相談した」マタイ12：11～14

イエス様が地上に人の子として来られた時、安息日は本来のあるべき状態から程遠い状態にありました。伝統的な規則と制約に縛られ、それが守られないと激しく非難されるのでした。このような状況にあって、イエス様は正しい安息日の理解について、多くの人々を安息日に癒されることを通して教えられました。イエス様が安息日に人を癒されると、ファリサイ派の日地人は怒ってイエス様を殺そうと相談しました。一人の病で苦しんでいた人が癒されたのに、それを喜ぶのではなく苦々しく思うほど、彼らの宗教は愛に欠落し歪んでしまっていたのでした。わたしたちも、安息日に悲しむ人を慰め、苦しむ人を和らげ、愛の奉仕の業を行うことは正しいことです。

【木曜日・土地のための安息】

「六年の間は畑に種を蒔き、ぶどう畑の手入れをし、収穫することができるが、七年目には全き安息を土地に与えねばならない。これは主のための安息である。畑に種を蒔いてはならない。ぶどう畑の手入れをしてはならない」レビ25：3，4

6年にわたって種を蒔き収穫した畑は、7年目に休ませなければなりませんでした。土地までが7というサイクルごとに安息に入るというのは驚くべきことです。土地を休ませるというのは、土が生き返るので良いことですが、その年は収穫がゼロとなるわけですから、生活が大変になります。しかし神様は次のような約束を与えてくださいました。

「わたしは六年目にあなたたちのために祝福を与え、その年に三年分の収穫を与える。あなたたちは八年目になお古い収穫の中から種を蒔き、食べつなぎ、九年目に新しい収穫を得るまでそれに頼ることができる」レビ記25章21、22節

7年目の休耕を迎える前の年に、3年分もの大豊作を神様は約束してくださいました。神様の恵みが先に与えられるわけですから、信仰のチャレンジとしてはハードルはそれほど高くはありません。しかし、それでも8年目は不作になるかもしれません。欲が出てもっと収穫を得たいと思うかもしれません。そう考えると、口で言うほど簡単なことではなかったことでしょう。

また、7年目には身売りして奴隷となった者たちを解放しなければなりませんでした。未払い分は免除されるのでした。